

伊藤正子著

『戦争記憶の政治学——韓国軍によるベトナム人戦時虐殺問題と和解への道』

平凡社、2013年、2,800円＋税、292頁

加藤敦典

著者の伊藤正子氏（以下、敬称略）はベトナムの民族問題を専門とする地域研究者である。これまで『エスニシティ〈創生〉と国民国家ベトナム——中越国境地域タイ族・ヌン族の近代』[伊藤 2003]（東南アジア史学会賞受賞）、『民族という政治——ベトナム民族分類の歴史と現在』[伊藤 2008]（英訳は [Ito 2013]）などの業績を通して、ベトナムの少数民族の多くが国民国家体制のもとで不当に表象され、政治的な声を与えられてこなかったことを批判的に描きだしてきた。また、本書のあとには『原発輸出の欺瞞——日本とベトナム、「友好」関係の舞台裏』[伊藤・吉井編 2015] を刊行し、少数民族の居住地が原発建設予定地となっていることの背景にある国内的、国際的な不正を告発している。ベトナムでは、共産党や国家政策の根本を批判する言論（とくに民族、宗教、人権などに関する言論）は厳しく統制されている。したがって、これらの問題に対して対抗的な議論を展開することは、ベトナム国内での調査を妨害されるなど、地域研究者としての仕事の足場を失いかねない危険性をもっている。それでもあえて言うべきことは言うという著者の覚悟に、まずは敬意を表したい。

この書評の内容は 2012 年 2 月 2 日に京都大学で開催された合評会での議論を土台としている。合評会では伊藤正子の報告に続いて、野平宗弘、兼清順子、佐々木祐、伊地知紀子のコメントと全体討論がおこなわれた（評者は司会として参加した）。この書評では、合評会で議論になった「記憶にフタをする／記憶の底が抜ける」という問題を中心にとりあげることにする。したがって、ここで言及する内容の多くは合評会での討論に負っている。ただし、文責はすべて評者にある。

本書の構成は以下のとおりである。

- 第 1 章 韓国における記憶の語り方
- 第 2 章 ベトナムにおける記憶の語り方
- 第 3 章 交錯する記憶——報道 10 年後の軋轢
- 第 4 章 記憶の戦争——和解への道とは

附章 これまでの研究について

本書では、ベトナム戦争中に韓国から派遣された兵士たちによるベトナム民間人虐殺事件の記憶をめぐる韓国社会とベトナム社会の動向が論じられている。ベトナムに留学した韓国人学生のカ・スジョンが発表した虐殺に関するレポートや、それに触発された韓国の週刊誌『ハンギョレ 21』のキャンペーンなどが韓国国内で引き起こした言論の対立、カ・スジョンや韓国の NGO による被害者家族との民間レベルの交流、ベトナム国内の地方ごとの慰霊・追悼のありかたの違いとその背後にあるベトナム政府による戦争の記憶の統制と管理などが、著者自身による聞き取り調査も交えて描きだされていく。

ベトナム政府は「過去にフタをして未来へ向かおう」というスローガンのもと、いずれの国に対しても戦争被害の賠償を請求しない方針を立てている（76 頁：以下、本書からの引用は数字のみ記す）。これはベトナムが国是とする全方位外交に沿った方針であるといえることができる。実際問題として、中小国であるベトナムは、大国のあいだでうまく立ち振る舞うことで、各国からの経済的・軍事的な支援を得つつ、貿易関係を維持し、経済発展を遂げていく必要がある。しかし、「過去にフタをして未来へ向かおう」という外交方針は、国家の利益にそぐわない被害の記憶を抑圧することにもつながる。事実、ベトナム政府はカ・スジョンらの活動に対して一定の好意的な反応を示しつつも、韓国政府との軋轢をさけるため真相究明の活性化に対しては抑制的な態度を維持している。

いっぽう、政府の方針にもかかわらず、ベトナムの一部の新聞社や市民が韓国側の NGO の活動に対して積極的に呼応してきたことも事実である。カ・スジョンらの活動を報じた Tuoi Tre 紙には市民からの問い合わせが相次ぎ、1999 年にはホーチミン市で「カ・スジョンとの交流」という討論会が開催された。また、2000 年には韓国軍による虐殺を描いたヴァン・レーのドキュメンタリー映画『怨みの霊の遺言』（2000）がベトナム全土で上映された。

戦争被害の記憶をめぐるせめぎ合いは、ベトナムの地方レベルでもさまざまなかたちで展開している。たとえば、ベトナム中部のクアンナム省ハミ村では、多数の民間人を殺害した青龍部隊（韓国海兵隊第 2 師団の通称）に属していた韓国の軍人たちが虐殺被害の追悼碑を現地に建立しようとするのだが、その追悼碑に刻まれたベトナム語の詩文のなかに韓国軍の残虐性を直截的に描く表現があったため、軍人たちは反発し、また、韓国外交通商部からも現地に圧力がかけられた。このとき、むらびとたちは文言を修正するか、あるいは詩文を全削除するかという選択肢を提示され、結局、全文削除を選択する。しかし、彼らは「修正するくらいなら「フタをする」と言って、蓮の絵柄を彫った石版で、碑の裏面を覆い、本当にフタをしてしまった」（111-112）。つまり「過去にフタをして未来へ向かおう」というスローガンを皮肉なかたちでなぞることによって、むらびとたちは彼らの矜持を示すとともに、記憶にフタをするということがどういうことであるかを象徴的に示してみせたのである。

そういった騒動の傍らで、NGO ナワウリやカ・スジョンはハミ村を何度も訪問し、虐殺の生き残りの人びとと交流し、彼らに対する日常生活の支援をおこなっていった。虐殺

を生き残った人びとと韓国の若者たちのあいだで展開した「互いの痛みを心をはせる交流」は、追悼碑をめぐる騒動を通じてより深化したという (114)。虐殺の生き残りの人びとと韓国の若者が出会い、また、ベトナムの若者と韓国の若者が出会うなかで、抑圧された被害の記憶は、積極的に語られることはなくとも、日常的な交流を通じて共有されていく。「フタ」をしたはずの記憶の容器の底が抜け、中身が密かに流れだし、そして、誰かと誰かがつながっていく。それにより、被害の記憶は維持され、人びとは何らかのかたちで慰められていく。おそらく虐殺の生き残りの人びとは虐殺の事実を決して忘れることはない。しかし、自分たちと真摯に向き合う韓国の若者との交流を通して、彼らは少しだけ「韓国人」を赦そうとする。

そこで生まれる和解とは、しかし、不思議な和解である。「殺した側」と「殺された側」の和解ではあるのだが、多くの殺人事件の和解がそうであるように、それは当事者同士の和解ではありえない。誰と誰が和解するのか。誰が誰として和解するのか。虐殺の生き残りの人びとにとって、それはさしあたって重要な問いではないかもしれない。しかし、そこに「第三者」として入り込もうとする私たちにとっては、立ち止まってよく考えてみるべき問題であるように思う。

国家と国家のあいだの軋轢を引き起こす記憶を押し込めようと「フタ」をしても、記憶の鍋の底は抜けてしまい、記憶は外に流れだす。そして、虐殺の記憶は地を這うようにどこかにつながっていく。そのときに記憶のなかに立ちあらわれてくる死は、決して英雄的な死ではない。誤解を恐れずにいえば、それは「無意味」な死である。このことが、考えるための手がかりになるかもしれない。ク・スジョンは次のように書いている。

筆者が (中略) その過程で向きあわなければならなかった死は、今まで死に対して抱いていた高尚で厳粛な全ての概念を覆してしまうのに十分だった。かれらは「ベトコン」ではなかったように「烈士」でもなかったし、かれらの死は感動的でも悲壮でもなかった。それでかれらは死んでも厚遇されなかった。犠牲者たちには烈士の称号も、ベトナム政府の補助金も、韓国政府の補償もなかった。しかしその歳月の間、かれらは黙々と慰霊碑をたてて、慰霊祭を行って犠牲者たちの魂を慰め、資料をつくって自分たちの傷を歴史に刻んでいた (27) (『ハンギョレ 21』1999 年 9 月 2 日第 273 号より転載)。

ベトナム語の表現を使うなら、彼らの魂は「冤魂」(oan hong) というべきものである。無実の罪で死んだ人びとの、怨みのこもった魂である (これはまさに映画『怨みの霊の遺言』のタイトルに使われていることばである)。彼らの死は勝利に終わった革命と戦争の記憶に支えられたベトナムのナショナリズムのなかでは安定した位置を保つことができない。ようするに「輝かしい勝利」になんら貢献していない、生き残りの人たちが語る「ハミ村の虐殺」は、ベトナム国家の公的記憶になりえないのである (206)。たしかに、ホーチミン市の戦争証跡博物館に行けば、逃げまどい虐殺される民衆の写真や枯れ葉剤の影響で生まれずして命を失った胎児たちのホルマリン漬けが帝国主義の残虐さとベト

ナムの民衆の苦しみを表象するものとして展示されている。しかし、それらの命も、そして韓国軍に虐殺された人びとの命も、やはり「意味ある死」ではありえない。戦争のさなかに、無意味に、無残に奪われたいくつかの命にすぎない。もちろん、これらの死は、戦争の悲しみと極限状態における人間の残虐さの証左として人類史にその跡を刻んでいると言えるかもしれない。しかし、そんなことで彼らの魂が慰められることはないだろう。

小田実〔2008a〕は日本の戦後ナショナリズムを論じる脈絡で「難死」ということばについて語っている。小田は「公状況」（公の大義名分）と「私状況」（私の事情）という対比を示し、敗戦後の日本社会を「公状況」が「私状況」を規定していた戦時体制から「私状況」が解放される（あるいは「私状況」だけが跋扈する）事態への変化として位置づける。敗戦後の日本社会では、人びとは良くも悪くも「私の事情」に従って生きるしかなくなる。そして、それは意味ある死が賞賛される時代が終わり、意味のない「難死」がナショナリズムの中核に入り込むようになったことでもあった、と小田は指摘する。

小田が戦時中に日本で目にした死は、決して英雄的なものではなかった。

私にとって、死とは——映画で見たり新聞で読んだりしたものではなくて、本当に自分の眼でおびただしく見た死は——決して、特攻隊員の死のように、たとえば「散華」という名で呼ばれるような美しいものでも立派なものでもなかった。また、彼らの死のように「公状況」にとって有意義な死でもなかった。私が見たのは無意味な死だった。その「公状況」のためには何の役にも立っていない、ただもう死にたくない死にたくない逃げまわっているうちに黒焦げになってしまった、いわば、虫ケラどもの死であった。〔小田 2008a: 4〕

105

彼らの死は「ただ、みにくく」〔小田 2008a: 5〕、そして「たしかなことは、彼らの死が（中略）天災に出会ったとでも考える他はない、いわば「難死」であったという事実」〔小田 2008a: 6〕である。

「難死」がナショナリズムの中核に入り込むことは、ふたつの点で危うさをはらんでいる。第一に、戦後しばらくして現れた三島由紀夫の文学や、彼に触発された若者たちの行動が象徴的に示すように、「公状況」をふたたび取り戻そうとする動き、すなわち死に意味を与えようとする動きが出てくる怖さである〔小田 2008a: 9-10〕。第二に、自分たちは「難死」を経験してきた国民だという自画像を日本人が描くことで、たとえば、ベトナム戦争のもとで悲惨な目にあった民衆たちと自分たちを同化してしまう怖さである〔小田 2008b: 242〕。人びとはそこにもつばら被害者としての連帯を求めてしまい、自分たちの加害者としての立場を忘却してしまう。本論との関わりで重要なのは後者の問題である。

多くの日本人にとって「ベトナム戦争」ということばから連想するのは、戦争のなかで殺される農民の悲惨なさまであったと小田は指摘する〔小田 2008b: 242〕。このようなイメージのもとでベトナムの民衆に同情するとき、私たちは「戦争の被害者としての意識だけが強烈にからだのうちにあって、加害者としての意識が希薄、いや、ときにはかいもく欠如している」〔小田 2008b: 243〕。そして「彼らは悲惨だ。無力だ。罪もない。同じよ

うに、自分たちも悲惨であり、無力だった。ゆえに罪はない」[小田 2008b: 244] と考えるようになる。そこには「どうせ、みんな、無力やないか、同じ事やないかという平等の認識」が生まれることになる。そして「無力における平等」[小田 2008b: 245] の意識をもったとき、「私たちの心には、ベトナム戦争に自分の戦争体験を無条件に二重写しさせることで過去をアイマイにするという働き」[小田 2008b: 245] が生まれる。

私たちは、立ち止まって考えなければいけない。ハミ村の虐殺の生き残りの人びとに共感するとき、私たちは誰として、誰とつながろうとしているのか。彼らの境遇に同情することは必要である。しかし、その同情は「無力における平等」に基づく連帯意識を生み出すものであってはいけない。

では、どうすればよいのか。必要なことは、これらの「難死」に意味を与えることに抵抗しつつ、しかし、その死を葬り去らないことである。そのためには、ク・スジョンたちが教えるように「個々人の記憶の重要性を認識し、その掘り起こし積み重ねによって、ナショナルヒストリーからはじき出されてしまっている（中略）様々な記憶、あるいはまだ大きな注目を浴びていない記憶を、丹念につないで行くこと以外にない」（230）。

それらの記憶は決して立派なものでも、ありがたいものでもないかもしれない。むしろ、きわめてみじめな「犬死」の記録としか言いようがないものかもしれない。それらの死は悲劇であるが、誤解を恐れずに言えば喜劇でもある。それらの死は、あまりに惨めすぎる。惨めすぎるゆえに「雑駁で豊穡な「難死」の可能性をもって生きる人たちを主人公とした喜劇」[小田 2008a: 10] としてこの世界を理解することを私たちに要請する。それは「無力」でありながらも何とか生きながらえようとした人びとが作り出す世界である。それはたくましい営みでもあり、滑稽な悪あがきでもある。

そのような世界に関わりつづけるための論理と倫理を「「殺すな」、「殺せ」がせめぎあうたたかいの現場」[小田 2008b: 281] のなかで考えつづけることが必要なのではない。もちろん、それは容易ではない。しかし、「殺すな」という叫びは強靱なものであるはずだ。「私を殺すな」「彼らを殺すな」「お前は殺すな」と叫ぶこと。しかし、殺さざるをえないこと。それでも殺してしまうことにあらがい続けること。虐殺の生き残りの人びとと韓国の若者たちの交流は、決して「無力における平等」のもとでのなれ合いの和解をもたらすようなものではないだろう。記憶の底が抜けたとき、そこでつながる私たちは「殺すな」という叫びをもう一度聞くことになる。そしていつか「殺すな」の叫びとともに虐殺の記憶を思い出すことができれば、私たちは今度こそ、もう少しまともな結末を迎え入れることができるはずである。

<参考文献>

- 伊藤正子 2003 『エスニシティ〈創生〉と国民国家ベトナム——中越国境地域タイ族・ヌン族の近代』三元社。
- 2008 『民族という政治——ベトナム民族分類の歴史と現在』三元社。
- 伊藤正子・吉井美知子共編 2015 『原発輸出の欺瞞——日本とベトナム、「友好」関係の舞台裏』明石書店。

小田実 2008a (1965) 「「難死」の思想」小田実『「難死」の思想』岩波書店、pp. 1-40
(初出は『展望』1965年1月号、のちに『戦後を拓く思想』講談社、1965年)。

——— 2008b (1976) 「「殺すな」から」小田実『「難死」の思想』岩波書店、pp.
227-304 (初出『世界』1976年1月号、のちに『「殺すな」から』筑摩書房、1976年)。

Ito, Masako 2013 *Politics of Ethnic Classification in Vietnam*. Translated by Minako Sato.
Kyoto, Japan: Kyoto University Press.